

# 新春特別対談 濱瀬元彦 × 菊地成孔

日本を代表する音楽家であると同時に、音楽理論にも造詣が深く多くの著作を持つ2人。日本の音楽界を代表する2人の知性によるスペシャル対談

菊地成孔（以下、菊地） 濱瀬先生が、ブラジル音楽に、一見やつてらつしやることとの振り幅も大きいです。じゃないですか。意外な人が、意外な音楽に詳しくってことはありますけど、濱瀬先生がブラジル音楽やバリーなつてなつたのは、何がきっかけだったんですか？

濱瀬元彦（以下、濱瀬） やっぱりジョアン・ジルベルトですよ。

菊地 ということは、一般的な日本のボサノヴァ・ブームと一緒ですか？64年の『ゲッツ／ジルベルト』とか、ちょうどオレが生まれた頃で……去年（2014年）『ゲッツ／ジルベルト』が50周年で。

濱瀬 そうですね。「イパネマの娘」が、ヒットチャートでヒットしたときに、はじめて聴いたんですけどね。当時ビートルズがバリバリだった時代のヒットチャートで。

菊地 ビートルズと実は同時期なんですすよね。

濱瀬 もう当時、僕は中学生だったからね。ラジオにかじりついて。アメリカのビルボードのチャートをAMのラジオでやってたのね。ヒットチャートに出てくるものを兎に角聴いていて。その中に「イパネマの娘」がボンとあった。これは何と素敵な音楽なんだろうと思います。

菊地 『ゲッツ／ジルベルト』の「イパネマの娘」？

濱瀬 ジョアン・ジルベルトの歌声をカットしたバージョンですよ。ね。だけど、当時「カマトト唱法」って言われていたけどああいうのがステキだなあと思つて。だけど、ビートルズ

が好きだけど、こういうのはちよつとピュラー過ぎるんじゃないかと。結局途切れて、ジャズを聴くようになって、ちやんと『ゲッツ／ジルベルト』を聴いたのは大卒に入ってからだよ。あまりにも素晴らしいんだけど、当時、僕がやってたのは、本格派のジャズっていうか、マイルスだったからね。いいんだけど、「こんないいやつ思つちやつていいんだらうか」つてね。あの当時ね、忘れないけど、ジョアン・ジルベルトの「三月の水」が入った『ジョアン・ジルベルト』つて、モノクロのレコードを友人が持つていて、それを聴いて、本当にいいと思つたんだよね。「これをこんなにいいと思つちやつていいのか」つて、自分で禁止をかけるような感じで。その後、もうちよつと経つてから『アモロソ』つてアルバムを新宿のジャズのレコード店で買った。

ジャズの後で、自分の音楽をやつていたんで、他人の音楽を聴けない状態になって、そこで度切れて。当時、すごく狭いところに入つていくような感じで。んで、年にCDを買つて3枚とかね。それでも3枚くらいは買うんだけど。そういうのが何年も続いているような状態が、自分のアルバムを初めて出した後で、急に色んなのが聴きたくなつて。ある種の表現がある種の社会的規模っていうか、ある条件の閉じたところで、表現やるつてのは、結構大きな問題で。自分の素手で表現しているつていうか……抑制してたものが聴きたくなつて、結局90年代になって、50年代のアメリカのアルバムをものすごく聴いた。ポピュラー音楽、クラシック・ポップスつて言われるような。シナトラとかも、ものすごく聴いたんですよ。毎日のように、渋谷とか下北沢に行つて、アナログのLPを集めたりね。でそういう下地の状態で、ジョアン・ジルベルトを再び聴いた。そしたらもう一気に、それを聴かない日はないというか。聴

かないと不安になつちやうつていうか。聴いているといいんだけど、聴いてない状態がないような状態になつて。そりや、なるだろうなつて。ジョアンが好きになつて、ジョアンのようなものがないかと思つて探して、なかなか見つからなかったんだけど、段々色んなものを聴いていたら、ジョアン以外のものも聴くようになって、段々を知識を深めていって、今日に至るつて感じですかね。

## ●ジョアン・ジルベルトについて

菊地 ジョアン・ジルベルトつて、例えば、ジャズにおけるマイルスとか、ロックにおけるレッド・ツェッペリンとか、一見ワンアンドオンリーで、ジャンルを背負つていようように言うけど、ジャンルつて広いから、2人以上結局いるわけじゃないですか。ジョアン・ジルベルトつて、結局ジョアン・ジルベルトしかいないですよ。これは伊藤ゴロー君が言つていたんだけど、「結局、ボサノヴァっていうのはジョアン・ジルベルトのことだ」つて。

濱瀬 事実そうですね。

菊地 そんなジャンルが珍しいですよ。レゲエにおけるボブ・マリーぐらいですよ。

濱瀬 ジョアン・ジルベルト原理主義を批判する人も、今や出て来ているんですよ。

菊地 当然出ますよね。ポリテックに考えれば。

濱瀬 やっぱりね。僕は全然原理主義ではないんだけど、あれだけの表現において、1つの完結した表現として、ジョアン・ジルベルトの欲望つてものが限無く、あらゆるところに行き届いていてね。完結している。ああいう姿つて、ああいう表現つて、他にあまり見ないし、そう簡単に、原理主義とかつて批判できるレベルの問題じゃないと思うんだよね。やっぱり非常に優れているつていうか、なかなかあれだけのものつて存在しない。

菊地 日本はボサノヴァ消費国家で、世界で一番ボサノヴァが好きくらいだと思つてですよ。「カフエ・ポッサ」みたいなも含めてですけど。だから、ボサノヴァに関するテキストとかもいっぱいあるわけじゃないですか。

濱瀬 ボサノヴァの色々なことを言える人が、今かなり増えてるよね。

菊地 増えてますよね。ボサノヴァにまつわるエピソードも沢山聞きますけど、ジョアン・ジルベルトつて、僕の考えでは、ギリギリ、アウトサイダー・アートつていうか……。ちよつとおかしいですよ。じゃないとあんなら。

濱瀬 普通じゃない。

濱瀬 実際、親に精神病院に入れられたことがあつて話もあるよね。

菊地 そうですよ。伝説とか、簡単な史実を繋ぎ合せても、やっぱり一種のアウトサイダーだと思つてますよ。アウトサイダー・アートつていうと、（ヘンリー・）ダーガミみたいに発表されないものまで含めちゃうから、「ちゃんとメジャーから出てるからアウトサイダーじゃないだろう、インサイダーだろう」と言えはそれつきりなんですけど。やっぱり、例えば、ドアーズのジム・モリソンがドラッグでめっちゃめちゃになつて、朝から晩までキチガイじみた発言を続けて、やがて若くして死んだとか、そういう見るだに気が狂つていようつていうロック的な狂い方じゃなくて、誰も当時おそろく、ジョアン・ジルベルトが気が狂つていようには聞こえなかつたわけじゃないですか。要するに「ソフト狂気」つていうか。狂気つていうのは、当時の茫漠としたイメージだと、えげつなくて強いもの、荒々しいものつていうか。ソフトに気が狂つていよう感覚つて、今だったらありますけど、当時多分無かつたと思つてますよね。

濱瀬 僕はあまりアウトサイダー・アート



撮影：須金信一郎



写真左：濱瀬がリーダーのユニット「濱瀬元彦 E.L.F. Ensemble+ 菊地成孔」。写真右：濱瀬元彦（左）と菊地成孔（右）。

とは思っていないんだけど。かなりオーソドックスなものは踏まえているし。自分がやっている表現に対しての、それを自分が欲望しているものと、そうじゃないものについての、その突き詰め方っていうのが、尋常じゃなくて、「表現」だから、そこまで行かないかや仕方がないと思うんだけど、そこまでやった人はあんまりいないと思うのね。作曲だとか、パフォーマンスだけとかじゃなくて、彼の場合、ギターの演奏も、歌も、曲は少ししか書いてないけれど、自分が現実化する音楽の形つてのをわかっていて、自分の欲望と演奏する音楽の間にズレつてのがあることを許さない。それでいて、聴くと音楽としては聴き易いし、快感のある音楽。リズムもメロデーも声も柔らかいしね。だけど、そこにある欲望の強度つてのは、ホントに半端ない。その在り方に、なんともいたく感動したっていうか。こういう在り方つてのが、1つあるのかなあつて。音楽の在り方としてね。非常に大きく影響を受けたつて言いますか。

**菊地** おそらく原理主義を批判するという意味で、ジョン・ジルベルトは「NOU」だつて言っている人々も、好きは好きだと思っただすよね。絶対に抗えないつていうか、後から色々書誌学的なことがわかってきて、後、状況を見直した上で、あんまり原理主義になるのもいけないんじゃないかつていう1つのパランスの考え方であつて、本当に心からダメとは感じていない、思っていないはず。

**濱瀬** その在り方に違和感を唱えているつていう。そういう人が多いことに対してね。

**菊地** 本当にそんな人珍しいですよ。ハードロックも好きだけど、リッチー・ブラックモアつてそうでもないんだよねつて、あるじゃないですか。ジャズ好きだけど、パーカーはそうでもないつて人さえないと思うんですよ、探せば。だけど、ボサノヴァ好きだけど、

ジョン・ジルベルトはちょっと……つて人は聞いたことがないし、あんなに魅力があつたら、さつき濱瀬先生がおつしやつたように、好きになつちやうつて段階で抵抗出るし。こんなに好きになつていいだろつて。つて。

**濱瀬** こんなにいいと思つちやうつていいのかわつてねえ。

**菊地** そんな気になることつて滅多にないですよ。粗がないつていうか。完全なものですよ。

### ●現在のブラジル・米国の音楽シーン

**菊地** ブラジル音楽が独立してなくて、ラテンとか大まかになつてる時間が相当長かつたですよ。アフリカ大陸と中南米を一緒にしているという牧歌的な人はもういないと思っただすけど。ブラジル音楽がブラジルの音楽として独立しているんだというイメージが、日本人のレコード好き/音楽好きがもつようになったのがそんなに昔ではない。あつて20年くらい。

**濱瀬** 20年経つてない。

**菊地** 単にボサノヴァという括りにしちゃうとジョン・ジルベルト以上はないと思つちやうじゃないですか。後は徒勞じゃないですけど……。

**濱瀬** その期間が長くてね。00年を越えてからくらいかな。サンパウロの音楽に、面白い人たちがいるなあと思ひ始めて、ジョン・ジルベルトだけではないなと。それから、もちろんジョン・ジルベルトも素晴らしいんだけど、あれだけをいっていつてたらダメ、大間違いだと積極的に思うようになった。美的な追求として、ブラジル音楽は世界で最も高度なことつてるんじゃないかな。

**菊地** そう思いますね。

**濱瀬** ミナスもそう。伝統的に面白けれど、新しい世代も面白い。新ミナス派、新・新

世代ミナス派と呼ばれている人たち。アントニオ・ロウレイロとか。クリストフ・シルヴァが中心だけどね。音楽の一番大事な部分というものが欠損してなくて、むしろ大衆化することで高度化している。すごいことつてているなと思います。自分はある程度できないけれど、違うやり方ですか。高度なことを音楽の最もいい部分を欠損させずにやるうとしてるのがミナスの新世界の連中。旧世代でもいいものを作っている人もいるけれど。あとはサンパウロの純音楽の人たち。サンパウロアヴァンギャルドの後継者とそれとそうではない人たち。前衛派じゃない、高踏派と呼ばれたりする人たちがやっていることは本当に素晴らしいよ。

**菊地** 08、09年くらいから、ジャズは、濱瀬さんお聴きになるかわからないですけど、ロバート・グラスバーとか……。

**濱瀬** 僕全然だめですね。グラスバーは何枚か持ってますが、いいと思えませんが、はつきり言つてここまで落ちてしまったかという感じですよ。

**菊地** 今、シーンの今は「ジャズ・ザ・ニュー・チャプター」といつてロバート・グラスバーだけではなくインド系のヴィジェイ・アイヤーとかを含めてジャズが10年代になつて二気に活性化したような状況になつて。それまでニューヨーク、21世紀になつてからのニューヨークつて、21世紀というのもあるかもしれないですけど、「ニューヨークは本場で、毎日セッションしてて、そこにはヤバイミュージシャンがいるから、ジャズを知るためにはニューヨークいかなないとダメだぜ」みたいな雰囲気はちょっとなくなつていた。例えば、ウイントン・マルサリス、ブラッド・メルドーとか一人一人はすごいんですけど。サクセスだとジョシユア・レッドマンとか。ちよつと前の90年代後半から00年代前代にやつてた人がスキルも才能もあるんだけど力



リスマに欠け、シーンがミュージシャンだけではなく、一般人がざわつくまで至らなかったのが、10年過ぎてから「今ジャズ」とか「ニュー・チャプター」とか言い方は安定していないんですけれど言われ出して、一気に活性化しました。グラミーとかを取ったり、いろんなものが動いている状況がある。ジャズの状況は「二分されているんですけど一つにはヒップホップやR&B、ドラムベースのように聴かせたいっていうジャズと。もう一方はそういう風ではないものにきかせたいっていうジャズと。昔三大ドラマーってあったじゃないですか。エルヴィン、トニー、ブレイキー。いまだとマーク・ジュリアナ、クリス・デイヴ、ジャマイア・ウィリアムスみたいなのがあって。ジャズもまだ状況的に活性化しなかなという時に、同時にブラジルのタチアナ・パーハだとか……。イギリスの65年の最初にブラジル音楽が

悪くいえばジャズに搾取されるような形で紹介されていた状況というのは、悪く言えば、ポピュラーミュージック界からしたら豊穡な20世紀の極点かもしれないくらい。20世紀のポピュラーミュージックは50年代も70年代も豊かですけど64、65年の状況は日本人にも何人でもボサノヴァがあつてモダンジャズもまだあつてハード・バップみたいなもにあつて安定的な商業的な路線が決定し、R&Bやファンクの初期もあつて、そして何よりビートルズがいて。英米ブラジルじゃないですか。それからワールドミュージックの時代が来てがいろんな国の音楽が聴かれるようになって今の11年くらいになつてもやっぱり英米ブラジルな気がするんですよ。なんで、ペルーとかならない、国力とかあるんでしょうか。アルゼンチンでもいいわけじゃないですか。

**濱瀬** アルゼンチンは二部で流行していますね。

**菊地** デイエゴ・スキッシミみたいなものもあるにはある。一時、アルゼンチン音響派、カブサッキなんか60年あたり来しましたけれど、一般的にタワーレコードでレコード買う音楽好きの青年とかまでには、あまりいきわたらなかつた。今はアントニオ・ロウレイロの『ソー』とか新しい時代のブラジル音楽のクラシックスつて捉えられているようなやつて、そこまで届き始めている感じがする。やっぱりブラジルつてすごいですよ。『ソー』とか聞くと、音楽教育のレベルの高さを感じる。

**濱瀬** アカデミックな場で、ポピュラー音楽としても優れた音楽をやっているのがすごい。ミナスなんかについている学生、もしくは卒業した連中が新世代のミナス派を形成している訳ですけど。

**菊地** 僕不勉強で知らないですけどミナスに音大みたいなものがあるんですか。

**濱瀬** ミナス・ジェライス州立大学に音楽課があつて。それが名門。高度な教育を受けた連中がアカデミック・コンテンポラリーミュージックではなくて、ポピュラー音楽の方に全力投球で能力をぶつけている。そこが大きく違う。全部をかけてますよね。それはすごいなと思いますね。

● 1964年 ↓ 2014年

**菊地** 快楽的に「I like it」なんかで音楽を買って聴きたいっていう人が歴史を知っていればいいという訳ではないですけど、リテラシーの二つとして、例えばハバナもラスベガス化しててアメリカの資本がいつばあつたのが、一気になくなつたんだとかいう。それまでは蜜月でキューバの人達がアメリカにおける南米の音楽とジャズの融合は最初がキューバで、その後ブラジルが続くまでにだいたいぶかかつているということも一般論的には知られていない。そういうことは何も知らなくても音楽が好きだという人がうようよい。そういうことを知らせるのがラティーナの仕事かもしれないですが……我々が聴いていいと思うかは別として、市場が活性化してるという意味では、トリックスターという意味もありますけどグラスパーとかが出てきて……それまではジャジー・ヒップホップといつてヒップホップ側がジャズを真似するだけだったんですけど、あるいはジャズミュージシャンがヒップホップやつてもファンクにしかならないうという状況を、もうちょっと変えたということだけで大騒ぎになっている。アンチもできて。ヒップホップみたいに聴かせたくない。純音楽的に先に進みたいと言つて。今、UKに第2のビョークと目されている子ができて。FKAトウィッグスというんですが、エレクトロニカと歌なんです。その人が、2015年のポピュラーミュージックを相当

変えるといわれています。彼女はイギリス人でビートルメーカーもイギリス在住のベネズエラの人なんです。時代の画期となるときはどうしてイギリスとアメリカとブラジルなんだろう。他の国が入ることはない。パリ発の音楽が、時代の画期となるときに入ることがない。

**濱瀬** 60年代のボサノヴァは、ブラジルがそこまでエネルギーがあつたかな。

**菊地** 『ゲッツ/ジルベルト』は変わったアルバムですよ。魅力も凄い。

**濱瀬** ブラジル音楽の隆盛の時代ですよ。アメリカでのボサノヴァのあり方とブラジルはあまりにも違う。アメリカン・ボサノヴァとしては隆盛を極めたんだけど、全くブラジルのものと違う。

**菊地** あれは一種の珍盤、奇盤。前後関係みても。

**濱瀬** ブラジルにおいては非常に大きなムーブメントであつたしベースになつたサンバとかサンバ・カンソンとかショーロも実態のあるもので存在していたけれど、アメリカには、その前にカルメン・ミランダが古い時代に消費されるけれど、ボサノヴァつてそれに近い表層的な消費のされ方したなあと。

**菊地** 64年と2014年の一番の違いは商業音楽の流通とかマーケットがとにかく革命的に変わつてしまったのでYouTubeでなんでも聴ける訳じゃないですか。名前さえ知っていれば、品書きさええければ物は当たるという時代で、当時では考えられない未来になつちやつたわけで。音楽は相変わらず演奏され、作曲され歌われているにも関わらず、それがコンテンツとしては革命的なことが起こつていて。逆に言うときれいなおイギリスとアメリカとブラジルとなるというのが不思議な気はするんですよ。20世紀中盤ぐらいの流通のあり方だとしたら、いくらでも操作ができるじゃないですか。搾取

